八王子城跡（八王子市）

築城年代：天正15年（1587年）、築城者：北条氏照

八王子城へのアクセスの途上には幾つもの案内板が立っていてその知名度が感じられる

ガイダンス施設→管理棟→大手門→古道→曳橋→虎口→御主殿跡→御主殿の滝→金子曲輪→小宮曲輪→本丸跡→八王子神社→松木曲輪→

→北条氏照及び家臣墓→宗関寺と順に見て行こう/本丸跡の西側には詰城があるようだ

前方の深沢山を中心に八王子城跡が展開する/山上の「要害地区」、山麓の「居館地区」、城山川の下流には「根小屋地区」が広がる

少し手前右手にある八王子城跡ガイダンス施設/この辺りは「根小屋地区」で、城への大手口として城下町の一部を形成したらしい

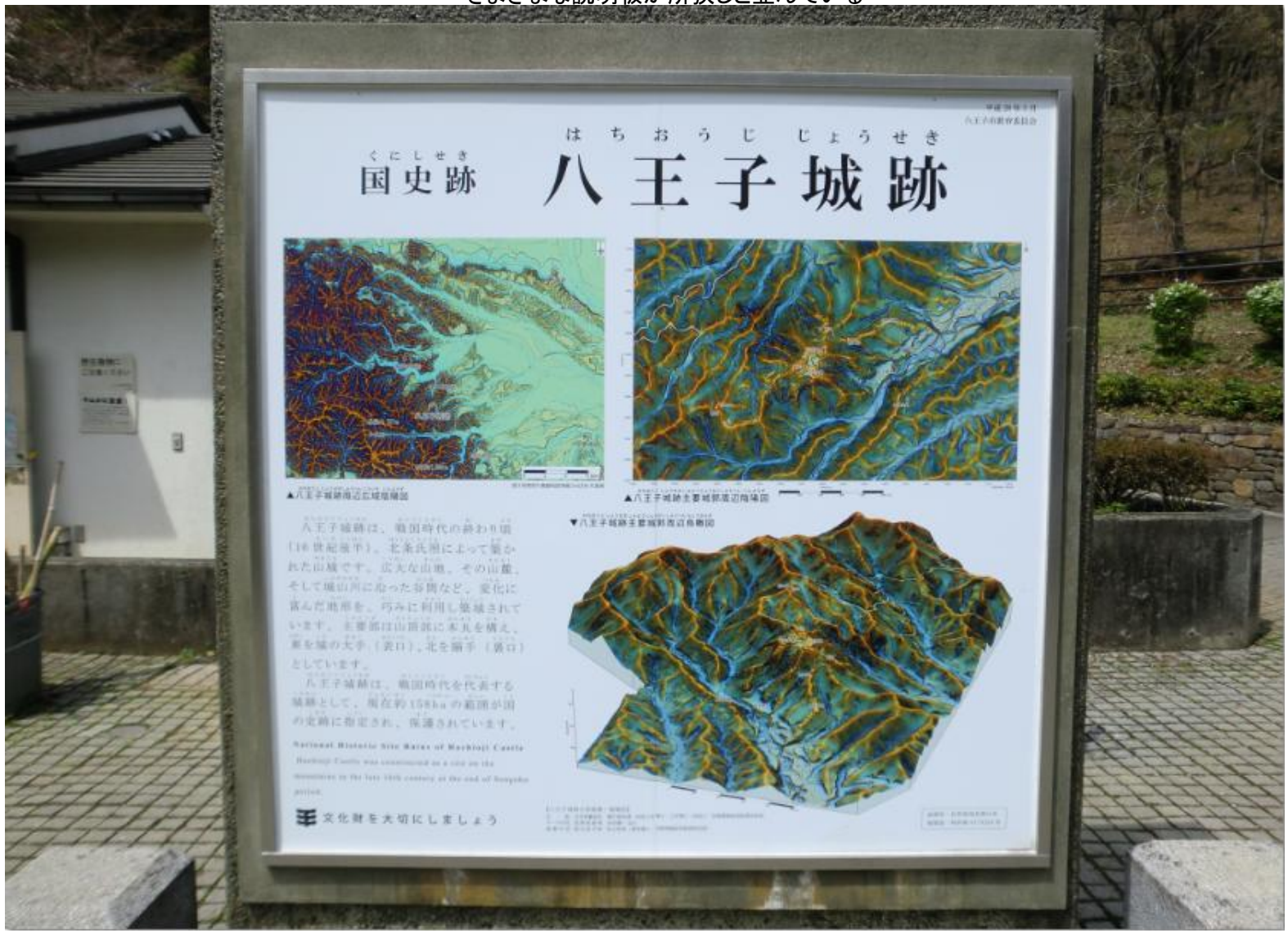
ガイダンス施設の外壁は校倉造風のコンクリート打ち放し仕上であった

駐車場に立つ標柱

さて、しばらく進むと八王子城跡管理棟がある/右手に登って行くと「要害地区」、左手を進んで行くと「居館地区」となる

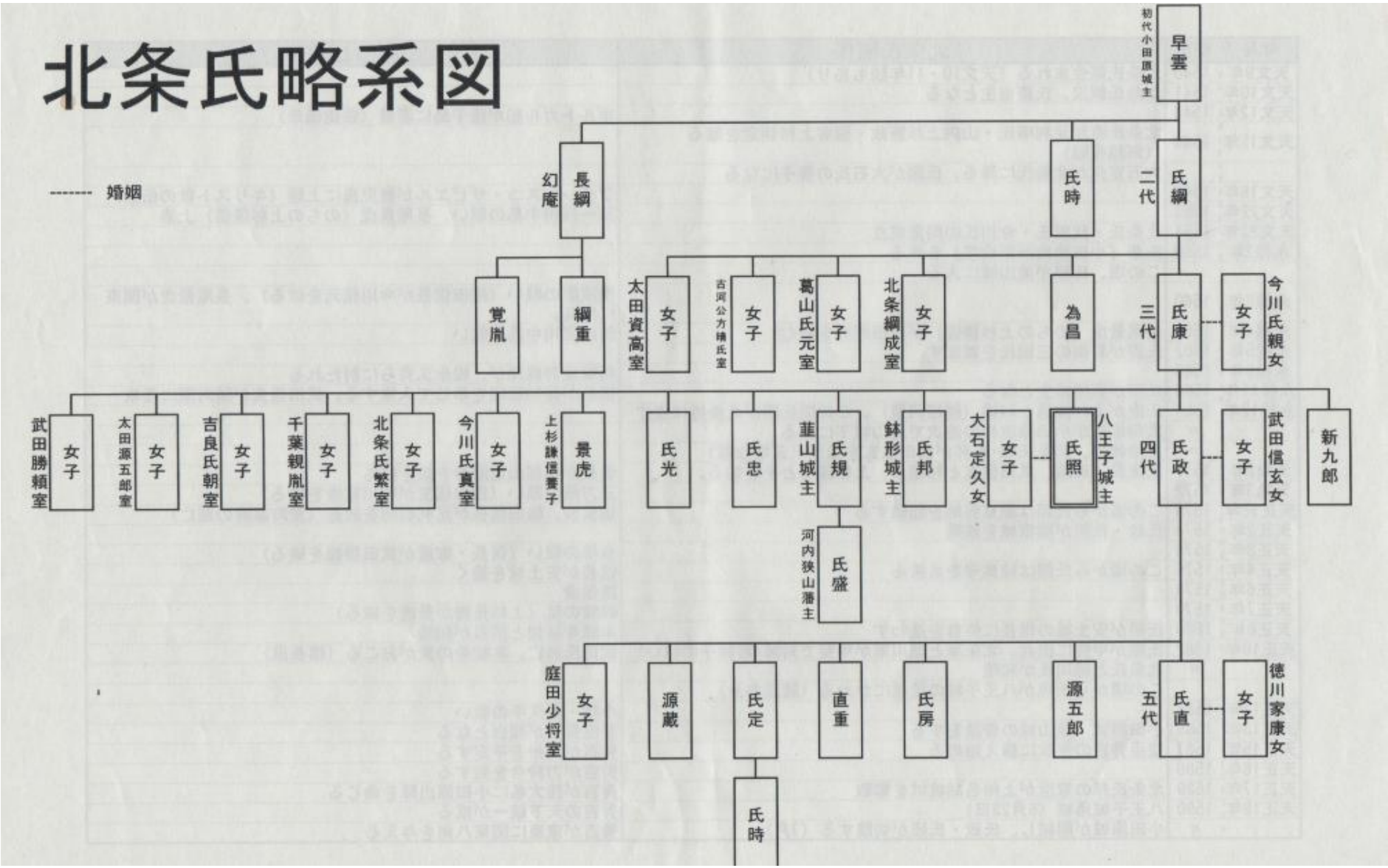
管理棟の辺りは近藤曲輪跡と云うらしいが

さまざまな説明板が所狭しと並んでいる



山頂部に本丸を構え、東を城の大手（表口）、北を搦手（裏口）としている

北条氏略系図



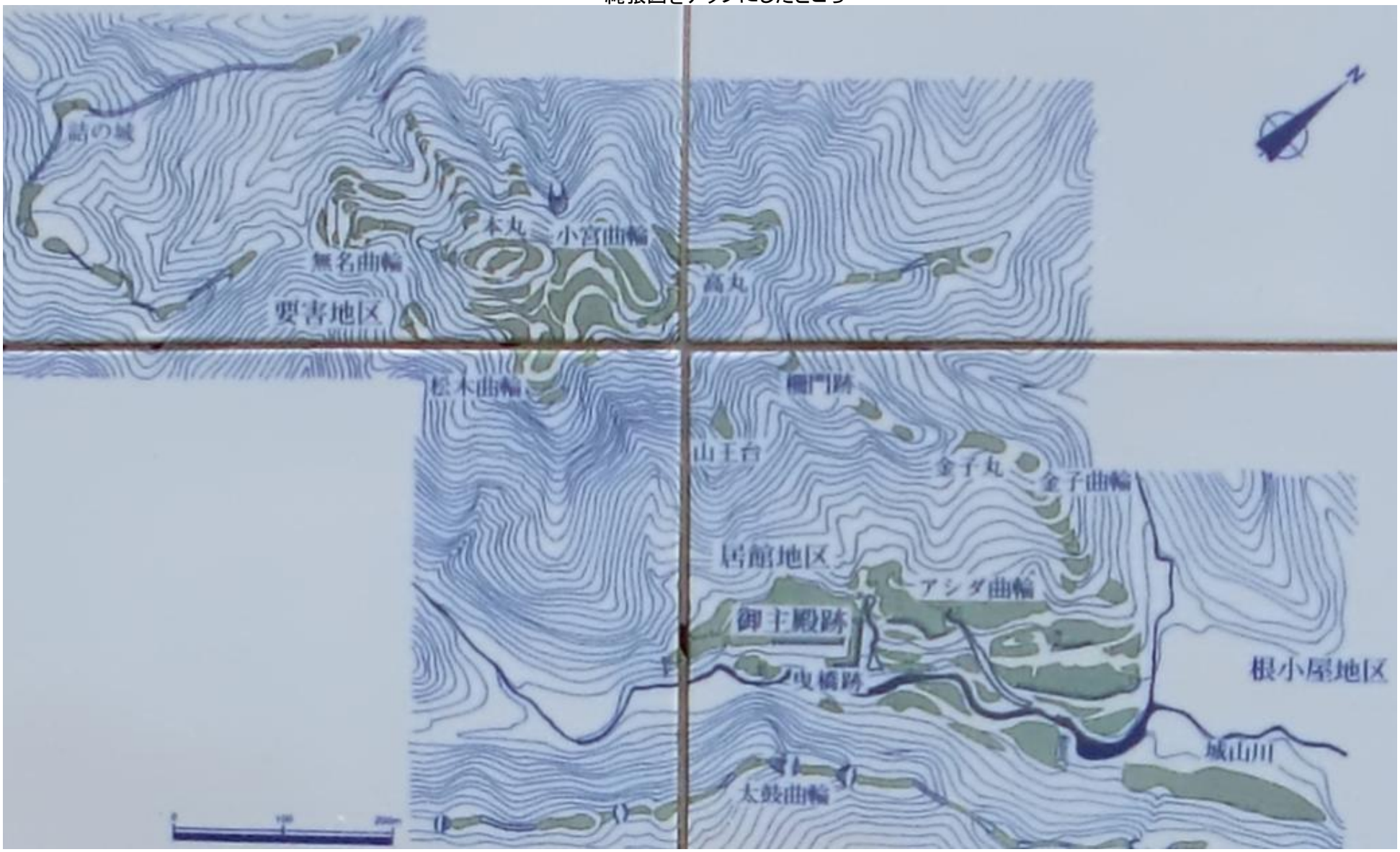
八王子城跡ガイダンス施設　資料より

年号	西暦	北条氏関係	主要な出来事
天文9年	1540	北条氏照生まれる（天文10・11年説もあり）	
天文10年	1541	北条氏綱没。氏康当主となる	
天文12年	1543		ポルトガル船が種子島に漂着（鉄砲伝来）
天文15年	1546	北条氏康が足利晴氏・山内上杉憲政・扇谷上杉朝定を破る（河越夜戦）	
		大石定久が北条氏に降る。氏照が大石氏の養子になる	
天文18年	1549		フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸（キリスト教の伝来）
天文22年	1553		第一回川中島の戦い。長尾景虎（のちの上杉謙信）上洛
天文23年	1554	北条氏・武田氏・今川氏の同盟成立	
永禄2年	1559	氏康『小田原衆所領役帳』を作る	
		この頃、氏照が滝山城に入る	
永禄3年	1560		桶狭間の戦い（織田信長が今川義元を破る）。長尾景虎が関東に出兵。
永禄4年	1561	長尾景虎（のちの上杉謙信）が小田原城を囲む	第四回川中島の戦い
永禄5年	1562	氏照が青梅の三田氏を滅ぼす	
永禄8年	1565		将軍足利義輝が、松永久秀らに討たれる
永禄11年	1568	氏照が栗橋城主となる	信長が足利義昭を奉じて入京する。武田信玄が駿河国に侵攻
永禄12年	1569	氏康が上杉謙信と和議（越相同盟）。この頃氏照が北条姓に復す	
	〃	武田信玄が小田原攻めの途次で滝山城下に迫る	
	〃	三増峠で、北条氏照・氏邦が武田信玄を追撃（三増合戦）	
元亀2年	1571	氏康没。氏政、武田信玄と和睦し、上杉謙信と手を切る。	信長が比叡山延暦寺を焼き打ち
元亀3年	1572		三方原の戦い（武田信玄が徳川家康を破る）
天正元年	1573	この頃から氏照は関東各地を転戦する	信玄没。織田信長が足利義昭を放逐（室町幕府の滅亡）
天正2年	1574	氏政・氏照が関宿城を攻略	
天正3年	1575		長篠の戦い（信長・家康が武田勝頼を破る）
天正4年	1576	この頃から氏照は陸奥守を名乗る	信長が安土城を築く
天正6年	1578		謙信没
天正7年	1579		御館の乱（上杉景勝が景虎を破る）
天正8年	1580	氏照が安土城の信長に使者を遣わす	本願寺顕如と信長が和睦
天正10年	1582	氏照が甲斐に出兵。北条軍と徳川軍が甲斐で対陣（若神子の戦い）	武田氏滅亡。本能寺の変がおこる（信長没）
	〃	北条氏と徳川氏が和睦	
		この頃から氏照が八王子城の築城にかかる（諸説あり）	
天正12年	1584		小牧・長久手の戦い
天正13年	1585	小田原城・韮山城の普請をする	豊臣秀吉が関白となる
天正15年	1587	豊臣秀吉の侵攻に備え始める	秀吉が九州を平定する
天正16年	1588		秀吉が刀狩令を発する
天正17年	1589	北条氏邦の家臣が上州名胡桃城を奪取	秀吉が諸大名に小田原出陣を命じる
天正18年	1590	八王子城落城（6月23日）	秀吉の天下統一が成る
	〃	小田原城が開城し、氏政・氏照が切腹する（7月）	秀吉が家康に関東八州を与える

八王子城跡ガイダンス施設　資料より

八王子城の縄張
八王子城の構造
縄張図
史跡指定地は約154ha
調査と整備
要害地区
居館地区
根小屋地区など

縄張図をアップにしたところ



古道・曳舟・御主殿
整備にあたって
調査結果と整備
整備工事
居館地区

山麓の「居館地区」

立派な標柱も立っている

さて、「居館地区」へと進もう/橋が架かっているが、これは沢を渡るためのもの

右手に管理棟からアシダ曲輪へ渡る橋が見える/下は巨大な堀切のような沢

この道を進むと御主殿跡へ辿り着くが、この道は近年の林道で、左手の城山川（堀の役目をした）の向こう側に大手道が通っている

橋を渡ると正面にこんな風景が現れる/正面前方の橋の下は堀切/左手に大手の門があり、大手道は橋を渡って右手に登って行く

アップで見たところ/橋の下は前方の太鼓曲輪からの堀切

左手に進むと正面に説明板が立っている

ここが大手の門跡

国指定史跡　八王子城跡
大手の門跡
昭和六十三年（一九八八）の確認調査でその存在が明らかになりました。以前から八王子城の古図などで、このあたりに門等の施設があることは予想されていました。
発掘された礎石や敷石などから、いわゆる「薬医門」と呼ばれる形状の門と考えられています。
コラム　大手と搦手
一般的に、城の裏門にあたるところを『搦手』と呼びます。なぜ裏門を搦手と呼ぶのかというと、正門に攻めてきた敵を背後から“搦めとる”軍勢が出撃するためという説があります。そのためか、正門は追手がなまって『大手』になったともいわれています。
八王子城の搦手は、城の北側の恩方方面にあったといわれ、滝の沢口ともいわれていますが、滝は落ちるという意味に通じるので、当時は霧降ヶ谷と名前を変えたともいわれています。
八王子市教育委員会

大手の門跡から御主殿跡へと大手道を前方に進もう

右手に説明板がある

古道（大手道）
地形に残る古道跡
古道からみた城山川対岸の景観予想図
発掘調査では、当時の道は明確に検出できませんでしたが、門跡の存在や橋台石垣の検出、さらに平坦部が尾根の中腹に連続していることから、ここが御主殿にいたる大手道であったことが明らかになりました。
現在の道は、この地形を利用して整備したものです。当時は、ここから城山川の対岸にアシダ曲輪や御主殿の石垣、さらに城山の稜線にそって連なる多くの曲輪や建物が見わたせたと思われます。

更に進むと左手にも説明板がある

国指定史跡　八王子城跡
古　道
戦国時代に御主殿へ入る道として使われていたと考えられています。
御主殿側の道は江戸時代に新たに作られた林道で、城山川をはさみ、御主殿とは対岸にあるのがこの古道です。当時は、さらに下流の方へと続いていたと考えられています。
途中の木橋を架けてある場所は、敵方の攻撃を阻止するために掘削された堀切です。
コラム　曳橋
古道から御主殿へ渡るために城山川に架けられた橋です。
橋の土台である橋台部が残っていただけなので、どのような構造の橋が架けられていたかはわかっていません。
現在の橋は、当時の道筋を再現するために、現在の技術で、戦国時代の雰囲気を考えて架けられました。
八王子市教育委員会

正面は対岸の御主殿跡へ渡る曳橋/下を流れるのが城山川

曳橋の向こうに御主殿跡の石垣が見える

橋台石垣と曳橋

検出した橋台石垣

城山川の両岸の斜面に、橋を架けるための橋台石垣が発見され、御主殿へわたる橋の存在が確認されました。当時はこの橋台に簡単な木橋を架け、この橋（曳橋）をこわすことによって敵の侵入を防いだものと考えられます。

橋台は、検出した石垣の崩れた部分を新たに補い、想定復原したものです。また、橋そのものは現代の工法で建造したものですが、史跡の景観に合うよう木造にしました。

御主殿への経路

御主殿へは、城山川上流域を越えて向かうため、このあたりに橋が架かっていたと考えられています。しかし、当時の正確な場所や構造、名称はわかっていません。

これまで使用していた「曳橋（ひき はし）」という名称は、江戸時代後期の地誌『武蔵名勝図会』の記載によるものです（文政三年脱稿：1820）。右下の拡大図にあるような、すぐに壊すことができる簡素な橋が架けられていたと考えられています。

今回整備した橋は、当時の復元としてではなく、見学者が御主殿跡へ行くための通路として城山川に架けたものです。

平成28年3月
八王子市教育委員会

「八王子城本丸跡荒涼ノ図」
（『新編武蔵国風土記稿』文政5年：国立公文書館所蔵）
※『武蔵名勝図会』は、同じ構図が使われています。

拡大

「八王子城古図」（個人蔵）
（慶安元年　1648）

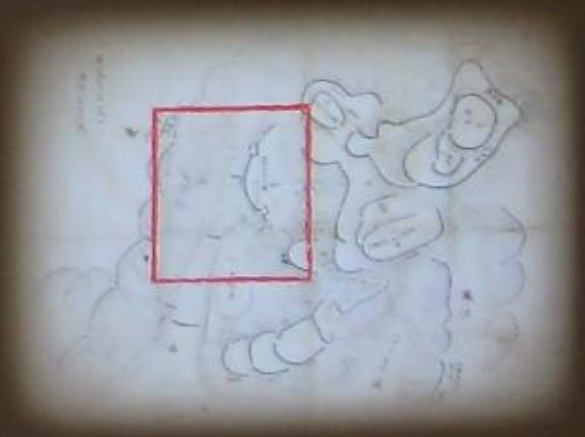
落城後の八王子城を描いたものには、「八王子城古図」のほか、『武蔵名勝図会』、『新編武蔵国風土記稿』などがあります。
「曳橋」の名称を記載しているのは、『武蔵名勝図会』だけです。

「八王子城本丸跡荒凉ノ図」

（『新編武蔵国風土記稿』文政５年：国立公文書館所蔵）

※『武蔵名勝図会』は、同じ挿絵が使われています。

拡大



「八王子城古図」（個人蔵）

（慶安元年：1648）

落城後の八王子城を描いたものには、「八王子城古図」のほか、『武蔵名勝図会』、『新編武蔵国風土記稿』などがあります。

「曳橋」の名称を記載しているのは、『武蔵名勝図会』だけです。

橋台石垣も見てとれる

曳橋を渡ったところ

築城当時の石垣

この石垣は、土の中に 400年間くずれずによく残っていたので、検出したそのままの状態にしてあります。戦国時代の石積様式を示す全国でも貴重なものです。

その特徴は、この城山山中から産出する

検出した石垣

る砂岩を利用して、ひとつ一つていねいに積み重ね、その隙間には小石を詰めて全体として強固な石垣としていることです。また、石垣の勾配が急なこと、石垣の裏側にたくさんの砕いた石を入れていることも特徴です。

近年の林道を進んでくるとここに至る

右手に折れると前方に説明板が見える

御主殿虎口

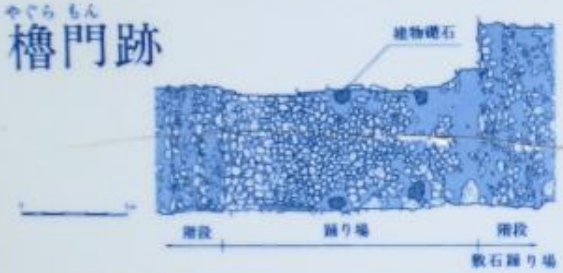
発掘時の虎口石敷階段

城や曲輪の出入口は虎口と呼ばれ、防と攻撃の拠点となるようにさまざまな工夫がこらしてあります。

御主殿の虎口は、木橋をわたった位置から御主殿内部まで高低差約９ｍを「コ」の字形に折れ曲がった階段通路としていることが特徴です。階段は全体で25段、踏面が平均１ｍ、蹴上が36cmで、約５ｍの幅をもっています。途中の２か所の踊り場とともに、全面に石が敷かれているのは、八王子城独特のものです。

御主殿虎口/途中の踊り場には櫓門があったようだ

櫓門跡



この踊り場からは、４つの建物礎石が発見されました。両側の石垣の下に、敷石の面より10cmほど高くなっている大きな石がそれです。礎石の間は、東西（桁行）約4.5 m、南北（梁間）3.6 mあります。想定される建物は、通路の重要な

検出時の踊り場

位置にあることから、物見や指揮をするための櫓門であったかもしれません。また、礎石のそばには、排水のための石組側溝も発見されています。

この礎石や石組側溝、大部分の石垣や敷石は、当時のものを利用しています。

「コ」の字形に折れ曲がった先には冠木門がある

ここが御主殿跡（城主北条氏照の居館跡）/東側から西方向に見たところ

御主殿跡の整備
八王子城跡御主殿遺構分布図
現在地
ここは八王子城の中心ともいえる場所で、城主北条氏照の居館があったところであり、御主殿跡とよばれています。
平成4・5年度、平成25年度に実施した発掘調査では、「主殿」「会所」と推定される大型の礎石建物跡や、池を中心とする庭園、敷石通路、水路等の遺構が検出されました。主殿では氏照を中心にして政治向きの仕事が、会所では来賓を眺めながら宴会などが行われたと考えられます。
今回の復元的整備事業では、これらの遺構の上に60cmの盛土となるよう造成工事を行い、その整備面上に建物の礎石、庭石、通路の敷石、水路等を忠実に再現して表示しています。
全体が発掘され、会所と推定できる礎石建物跡は、整備面から50～80cmの高さに床面を再現し、敷居、間取りも表してあります。
庭石、建物の礎石、通路の敷石、水路に使用した石材は、近隣で採取された八王子城跡と同種の硬質砂岩を使用しています。整備面より突出する庭石は、コンクリート製の擬石（GRC）で造ってあります。遺構の確認された範囲には、小礫石をまべてその範囲を明示しています。
なお、まだ全容が明らかになっていない池跡については整備せず、一度埋め戻しました。
平成26年9月
八王子市教育委員会

八王子城跡御主殿遺構分布図
N
0
10m
現在地

国指定史跡　八王子城跡
御主殿跡
御主殿跡は、落城後は徳川氏の直轄領、明治時代以降は国有林であったため、あまり人の手が入らず、落城当時の状態のままで保存され、遺構の状態も良好でした。平成四年（一九九二）から二年間発掘調査を行い、城主であった北条氏照が執務を行ったと考えられる、大規模な礎石建物跡をはじめ、さまざまな遺構が発見されました。調査の結果、氏照の生活の場はここからさらに奥に眠っていると思われます。
また、中国の磁器類の破片や国産の陶器、鉄砲弾をはじめとする武器・武具類などの遺物が発見されました。中には当時の武人のたしなみであった茶道具や、当時でも極めて珍しかったと思われるベネチア産のレースガラス器の破片も含まれ、氏照の生活ぶりがうかがえます。
八王子市教育委員会

御主殿跡を東側から西方向に見たところ/正面前方の辺りから右手に山を登って行く道が「殿の道」で、山王台へ行けるようだ

御主殿跡を西側から東方向に見たところ

これは南側の土塁を西側から東方向に見たところ

その土塁上から南側の曳橋を見下ろしたところ

その左手を見たところ/前方右手の沢向いに太鼓曲輪が展開する

これは「会所」

会所
会所は主殿で儀式を終えた後、宴会などを行った場所と考えられます。
広さは11間×6間(20.9m×13.3m)で、北側が主殿と廊下でつながっています。会所の北東には庭園が造られています。
会所は、同時代の他の建物の例などを参考に床を再現しています。

これは「主殿」

主殿
しゅ でん
主殿は中心となる建物で、政治向きの行事が行われたと考えられます。
広さは15間半×10間(29.4m×19.8m)で、折中門とよばれる玄関から入ります。大勢の人が集まる「広間」や、城主が座る「上段」などがあります。
建物は平屋建てで、屋根は瓦ではなく、板葺きか檜皮葺きと思われます。

これは「庭園遺構」

池を中心とする庭園遺構
現在池
会所と主殿の建物に囲まれた範囲に、池を配した庭が見つかりました。池は２段ないし３段に石を組んで護岸施設をつくり、池と陸がわかれるような構造となっていました。池底には粘土がはられていましたが、各種分析の結果から見ると、大雨の後に水がたまった程度のものであったと考えられます。池の護岸周辺には大きな石を配置して、庭の景色をつくっています。池の西側には池の近くに寄れるように石を敷き詰めた通路もみつかっています。池や庭に使われた石は八王子城周辺の山からとれる砂岩という石で、他から運んできたものではないようです。
池の全容が明らかになっていないため、今回は整備を行わず、埋め戻したままになっています。
平成26年9月　八王子市教育委員会

これは「塀跡」

塀跡
土色に舗装した部分が塀の範囲を示しています。
発掘調査では、礎石と狭間石の石列が検出されました。礎石に柱の痕跡が認められたものが3カ所ありました。いずれも5.5寸（約17㎝）の方形でした。
この塀は、会所の前面が見えないように作られたものと思われます。

これは「敷石通路」

敷石通路
会所の建物に沿って幅 4.2m、長さ19.2mの範囲に石が敷かれています。
敷石通路には２本の溝を伴っています。北側の溝は会所の雨落溝と考えられますが、南側の溝の性格は不明です。
この敷石通路は会所に伴うもので、何らかの儀式に使われたものと思われます。

これは「道路状遺構」

どうろじょういこう
道路状遺構
ここの道路状遺構は幅が約 3.2m、確認された長さは 15mで、南西側の調査区外へ続いています。北東側と南東側はそれぞれ石囲い水路に、北西側は石列によって区画されています。
路面は平坦ですが、突き固めている様子は見られませんでした。

ここから舶載磁器が集中して出土した

船載磁器集中出土域
東西約 7.5m、南北約 4mの範囲に、約34,000点以上の遺物が集中して出土しました。ほとんどが焼き物の細かい破片でした。
船載磁器とは主に中国で焼かれた磁器で、青花や白磁の皿や碗などです。
焼き物のほかには、銭、鉄釘なども出土しています。
この遺構の性格は不明です。

これは「掘立建物跡」

ほっ たて たて もの あと
掘立建物跡
土色に舗装した部分が建物の範囲を、着色した部分が柱の位置を示しています。掘立建物とは、地面に柱穴を掘りくぼめ、そのまま柱を立てた建物のことです。
発掘調査時に、内部が空洞になった柱穴が 16 カ所検出されました。落城の際に柱の根元が残り、その後柱が腐り、空洞化したものと思われます。

これは「塀跡」

塀跡
土色に舗装した部分が塀の範囲を、着色した部分が柱穴の位置を示しています。発掘調査時に、内部が空洞になった円形の柱穴が７カ所一列になって検出されました。
落城の際に柱の根元が焼け残り、その後その柱が腐り、空洞化したものと思われます。
柱穴

これは「塀跡」と「道路状遺構」

へい　あと
塀跡
柱穴
主殿の北東側に位置し、道路と並行してさらに北側の未発掘部分に続いていくようです。
土色に舗装した部分が塀の範囲を、着色した部分が柱穴の位置を示しています。
発掘調査時に、石列の間に6寸(約18㎝)の正方形の空洞になった柱穴が4か所検出されました。

どうろじょういこう

道路状遺構

通路と考えられる道路状遺構は主殿の北東側に位置し、さらに北側の未発掘部分に続いていくようです。東西の両側は石列となっており、その幅は 4.2m、確認された長さは 7.2mです。

路面は山砂利を多く含む黄褐色土を突き固めて構築され、中央部がやや高くなっていました。

そして、これは御主殿跡の南下にある「御主殿の滝」

国指定史跡　八王子城跡
御主殿の滝
天正十八年（一五九〇）六月二十三日の豊臣秀吉の軍勢による攻撃で落城した際に、御主殿にいた女性や子ども、将兵たちが滝の上で自刃をし、次々と身を投じたといわれています。
その血で城山川の水は三日三晩、赤く染まったとの言い伝えが残っています。
コラム　氏照の暮らしぶり
戦国時代はいつも合戦とその準備をしていたイメージがありますが、八王子城から出土した遺構・遺物から見てみると、そのイメージとは程遠いものです。
中国から輸入された五彩で華やかなお皿で、領国内から取れたアワビやサザエなどを食べたり、ベネチアで作られたレースガラス器や信楽焼きの花器を飾り、そのもとでお茶をたしなみ、枯山水の庭を眺めてお酒を飲んだ日々が思い浮かばれます。
これらの品々は、さぞ北条氏照の心を和ませていたのではないでしょうか。
八王子市教育委員会
落石注意
立入禁止

さて、アシダ曲輪（有力な家臣の屋敷跡らしい）付近を見てみよう

八王子城跡ガイダンス施設　資料より

これは管理棟からアシダ曲輪へ渡る橋

ここを上がって行くとアシダ曲輪/左手は山下曲輪（アシダ曲輪に含まれるのか）というらしい

前方に建物が見える

ここがアシダ曲輪/東側から西方向を見たところ

これはアシダ曲輪にある観音堂

観音堂
福善寺
城山

福善寺観音堂とある

西側から東方向に見たアシダ曲輪

アシダ曲輪の南側にはこのように土塁が築かれている

これは更に西側の平場/東側から西方向に見たところ/ここを進んでいくと御主殿のエリアに至るようだ

その平場を西側から東方向に見たところ

この平場にはこんな石造物が幾つもあった

さて、今度は管理棟の右手の道を進み、山上の「要害地区」へと行ってみよう

八王子神社の鳥居が立っている/標柱に八王子城本丸方面と記されている

ここを左手に折れて新道を進む/まっすく行くと旧道らしい

少し行くとここにも鳥居があり、ここから深沢山（城山とも云う）を登って行く

そこから左下を見ると先程見たアシダ曲輪の平場が見える/右手が観音堂/一段下の平場は山下曲輪か

さて、こんな道を登って行く

左手には何段にもなった小さな平場がある

それらの平場を上から下へ見たところ/腰曲輪（金子曲輪）のようだ

更に登って行くと金子丸がある

「尾根をひな段状に造成し」というのは、先程の腰郭のことのようだ

金子丸を上から下に見たところ

更に上に登って行く

結構ハードだ

暫くすると平場がある

ここは柵門跡

柵門跡
山頂の本丸方面へ続く道の尾根上に築かれた平坦地で、柵門跡と呼ばれています。名前の由来など詳しいことは不明です。
Sakumon Gate Site
This is where the Sakumon gate stood as part of the castle's defensive perimeter. It was built on a terraced section along the ridge line of the trail leading to the castle on the summit. The origin of its name and other details are unknown.
八王子市教育委員会

その右手はこんな感じ/この道が旧道のようだ

左手に進むと石碑が立っている/ここを右手に登って行く/左手の小道を行くと山王台というところに行くようだ

「邦井天界霊」と記されているのか/修験先達の慰霊碑のようだ

こちらにもある

こんな道を更に登る

この先に小さな平場がある

ここは高丸跡

左手に更に登って行く/この上は何やら開けている感じ

尾根道にちょっとした平場がある/腰曲輪であろうか

そこから左手（南方向）を見たのがこの景色

さて、ここで右上に斜面を直登してみよう

登った先には平場が見える

ここは小宮曲輪

標柱と説明板が立っている

小宮曲輪は三の丸とも一庵曲輪とも呼ばれていたと記されている

別の角度から小宮曲輪を見たところ

さて、ここを更に進んでみよう/北方向に向かう

こんな感じ

左手に折れていく

いよいよ、この上が本丸のようだ

本丸の虎口が見えてくる

ここが本丸跡（山頂曲輪とも云うらしい）

国指定史跡　八王子城跡
本丸跡
城の中心で、最も重要な曲輪です。平地があまり広くないので、大きな建物はなかったと考えられています。
ここは、横地監物吉信が守っていたといわれています。
コラム　八王子神社と横地社
延喜13年（913）に華厳菩薩妙行が、山中で修行をしている際に出現した牛頭天王と八人の王子に会ったことで、延喜16年（916）に八王子権現を祀ったといわれています。
この伝説に基づいて、北条氏照は八王子城の築城にあたり八王子権現を城の守護神としました。これが「八王子」の地名の起源とされています。
その八王子神社の横にある小さな社は、落城寸前に奥多摩へ落ち延びた横地監物が祀られています。もともと、東京都奥多摩町にありましたが、ダム建設で湖底に沈んでしまうためにここに移しました。
八王子市教育委員会

本丸の虎口を上から下へ見たところ

西側から東方向に見たところ

「八王子城本丸趾」と記された石碑

小さな祠が一つ建つばかり

東側から西方向に見たところ

これは西側を見下ろしたところ/平場らしきものがある/腰曲輪だろうか

東側にはこれも虎口のような道筋があった

その左下を見ると、ここにも平場がある

さて、本丸を下りて南下を見ると八王子神社の建物が見えた

下へ降りてみる

説明板が立っている

史跡八王子城跡　本丸周辺の曲輪
N
0
50
100m
本丸跡
松木曲輪
小宮曲輪
標高 460mの深沢山山頂に設けられた本丸を中心に、松木曲輪、小宮曲輪などの曲輪が配置された要害部は、籠城のための施設と考えられます。急峻な地形を利用した山城は、下からは攻めにくく、上から攻撃できる守りには有利な構造となっています。
天正 18 年（1590）旧暦 6 月 23 日、豊臣秀吉の命を受けた前田利家、上杉景勝、真田昌幸らの軍勢に加え、降参した北条勢を加えた数万の大軍が八王子城に押し寄せました。一方、小田原に籠城中の城主北条氏照を欠いた留守部隊は、必死に防戦しましたが、一日で落城してしまいました。激戦の末、守備した北条方はもちろんのこと、攻めた豊臣方にも多くの犠牲があったようです。
平成 25 年 3 月　八王子市教育委員会

上に八王子神社がある

ここから登る

ここが八王子神社で中の曲輪と云うらしい/左手前方の一段高い辺りは松木曲輪

横地社由来記

この上が松木曲輪

そこから振り返って中の曲輪を見たところ

ここが松木曲輪

説明板が立っている

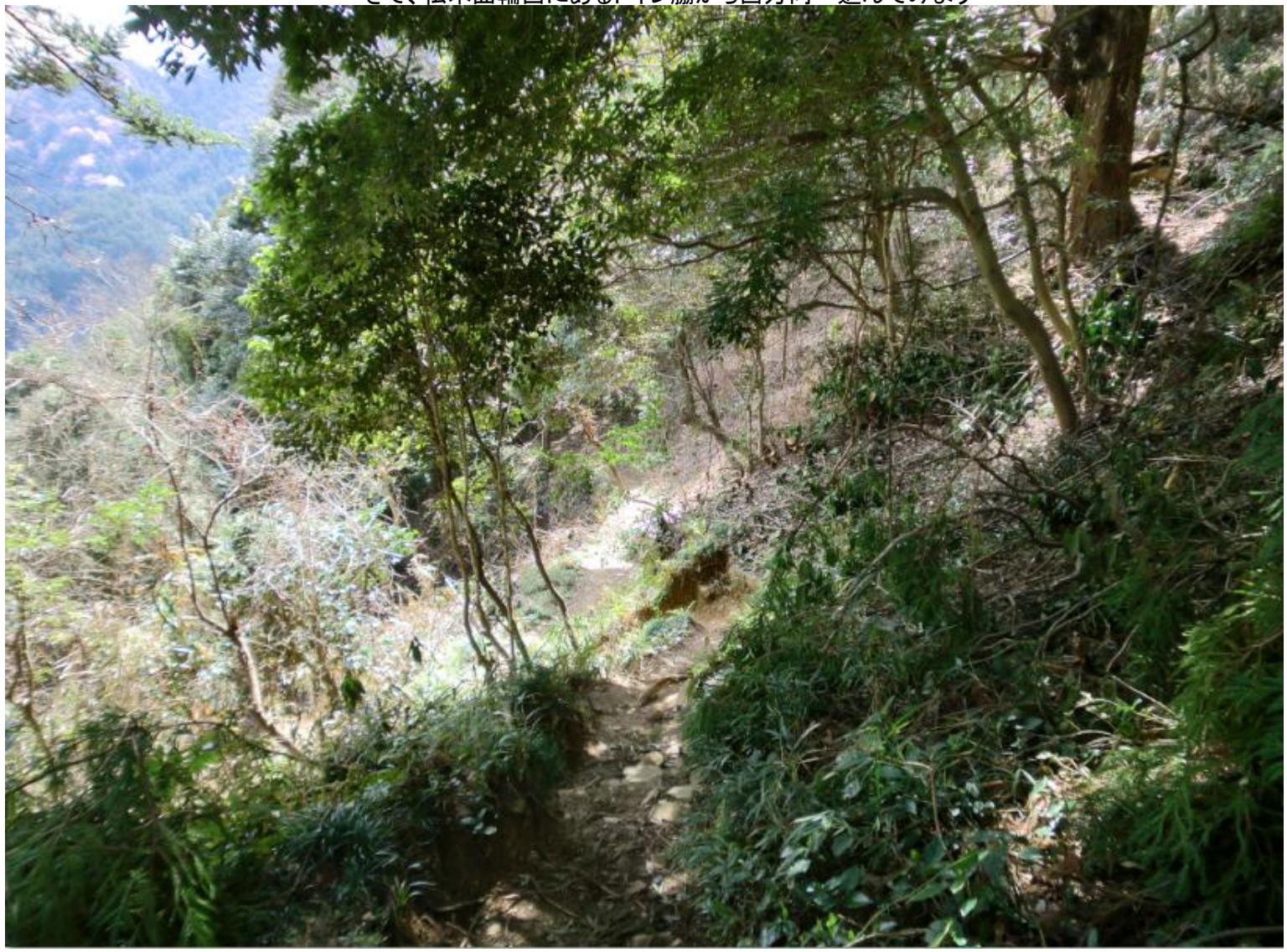
松木曲輪は中の丸とも二の丸とも呼ばれていたと記されている

こんな八王子城の古絵図の銅板パネルもあった

松木曲輪から南側を見たところ

これは南下から松木曲輪を見上げたところ/石垣は後世の物か

さて、松木曲輪西にあるトイレ脇から西方向へ進んでみよう



少し行くとこのような手押しポンプ式の井戸があった

更にこんなところを進んで行く

いやはや大変

この先が一段高くなっている

平場になっている

ここは無名曲輪というところのようだ

これは無名曲輪から下を見たところ/下にも平場（腰曲輪）があるようだ

ここを更に西方向へ行くと大天主と呼ばれる「詰の城」があるようだが時間的に断念

周囲には石積みのような跡が見られる

さて、次は「北条氏照及び家臣墓」へ行ってみよう

ここを左手に登って行く

前方に説明板が立っている

東京都指定旧跡

北条氏照及び家臣墓

所在地　八王子市元八王子町三
標　識　昭和三年三月
指　定　昭和三〇年三月二八日

北条氏照は、早雲の孫、氏康の子で、関東管領上杉家の老臣大石定久に代わって永禄二年（一五五九）頃、滝山城主となったときされています。氏照は、ほかに榎本・吉河・栗橋など数城を併有したときされ、後北条氏の勢力拡大に大きく寄与した人物でした。武蔵国と甲斐国の境に大規模な山城である八王子城を築いたことでも有名です。天正一八年（一五九〇）の小田原攻めでは、豊臣秀吉の武将前田利家・上杉景勝らの軍勢に対する家臣中山勘解由らの防戦もむなしく八王子城は落城しました。兄氏政を助けて小田原城にいた氏照も、開城後、兄とともに秀吉から切腹を命じられました。

現在ある氏照の供養塔は、勘解由の孫水戸藩家老中山信治が氏照の死後一〇〇年忌の追善供養のために建てたものです。両脇には、家臣であった勘解由と信治自身の墓もあります。

平成二四年三月　建設　東京都教育委員会

文化財を大切にしましょう

中央が北条氏照の墓

家臣の墓

ここは近くにある宗関寺/北条氏照の菩提寺

鐘楼の梵鐘は八王子市の指定文化財

その梵鐘

近くには綺麗に咲く桜の木があった

「澄ちゃん櫻」と云うようだ

参考ホームページ

http://jyokakuzukan.la.coocan.jp/001tokyo/012hachiouji/hachiouji.html

http://homepage3.nifty.com/azusa/tokyo/hatioujisi.htm

http://www5f.biglobe.ne.jp/~st_octopus/POI/tokyo/43hachiojijo.htm

http://www.kmine.sakura.ne.jp/tokyo/kouen/hachioujijyoushi/hachioujijyoushi.html

http://umoretakojo.jp/Shiro/Kantou/Tokyo/Hachiouji/

http://4619.web.fc2.com/place.battle3.html

https://akiou.wordpress.com/2015/07/01/hachioji/

http://www.geocities.jp/qbpbd900/hachiojijoseki.html

八王子川町郵便局
元八王子1号緑地
聖パウロ学園高
八王子霊園
裏宿さくら公園
首都圏中央連絡自動車道(圏央道)
八王子城跡
城山病院
中央自動車道
昭和天皇武蔵野陵
森林総合研究所(国立研究開発法人)多摩森林科学園
高尾保育園
高尾
京王高尾線
八王子JCT
小仏関跡
八王子市立浅川中
中央本線
Google